

「^{ぜんくねん えき}前九年の役・^{ごさんねん えき}後三年の役と宇都宮城」

重要視された宇都宮城

宇都宮城最初の城主といわれる^{ふじわらのそうえん}藤原宗円は前九年の役（1051～1062年）の際に奥州に進軍する^{みなもとのよりよし}源頼義に従って京都から下ってきたといわれています。

また、^{みなもとのよしいえ}源義家（^{はちまんたろう}八幡太郎）は後三年の役（1083～1087年）のとき^{ふたあらかやま}二荒山神社（宇都宮大明神）に戦勝祈願をしたといわれています。

文治5（1189）年、^{みなもとのよりとも}源頼朝は奥州藤原氏を攻めるにあたり、先祖である頼義・義家の例にならって戦勝祈願し、勝利のお礼として「^{せいりょ}生虜」（戦場で生け捕りにされた人）を二荒山神社に献じたとされています。

時代が下って天正18（1590）年、豊臣秀吉は小田原の北条氏を滅ぼして事実上の天下統一を果たしたとき、宇都宮城に滞在して、関東・東北地方の大名の配置を決める「^{うつのみやしおき}宇都宮仕置」を行っています。

このように、宇都宮および宇都宮城は、それぞれの時代で、東北地方との関係で重要な役割を果たしていたのです。

そこでまず、宇都宮城の起源とも関係する、前九年・後三年の役を見てみましょう。（つづく）

「^{ぜんくねん えき}前九年の役・^{ごさんねん えき}後三年の役と宇都宮城」

宇都宮氏の祖

前九年の役（1051～1062年）は、現在の岩手県で勢力をもっていた豪族・^{あべ}安倍氏が南下して、^{むつのくに}陸奥国（福島県・宮城県・岩手県・青森県）の^{こくし}国司と衝突したことからおこりました。この乱の平定に活躍したのが当時源氏の^{とうりょう}棟梁だった^{みなもとのよりよし}源頼義です。源氏は関東地方の武士たちとの関係を強めていましたが、朝廷の命令で、武士たちを率いて安倍氏と戦うことになったのです。

このとき、^{おうみのくに}近江国（^{しがけん}滋賀県）^{いしやま}石山寺の^{ふじわらのそうえん}藤原宗円という僧が、^{そう}頼義に従って下ってきたとされています。宗円は、頼義に命じられて宇都宮大明神（現・二荒山神社）で戦勝祈願を行い、その効果があつて安部氏を滅ぼすことができました。その功績で宇都宮大明神の^{しゃむしき}「社務職」（神官の長で、神社の領地の支配を行う。）に任じられたといひます。

この宗円が二荒山神社の南に館を築いたのが宇都宮城の始まりであり、子孫が代々「宇都宮」の苗字を名乗って城主を務めたとされています。

宗円の出身については、^{かんぱくふじわらのみちかね}関白藤原通兼の子孫であり、また^{てんだいざす}「天台座主」であったという言い伝えもありますが、別な説もあります。（つづく）

「^{ぜんくねん えき}前九年の役・^{ごさんねん えき}後三年の役と宇都宮城」

宇都宮氏の出自

^{ふじわらのそうえん}藤原宗円（宇都宮氏の祖）が名門貴族の出身だったということは、当時の資料にはっきり出てくるわけではないので、事実かどうかわかりませんし、実在の人物だったかどうかもわかりません。

宇都宮氏の一族・重臣の本拠地が、主に現在の栃木県南東部から茨城県にかけて分布していることや、宇都宮氏歴代の墓所が茨城県に近い益子町^{かみおおば}の上大羽にあることなどから、もともと宇都宮氏は常陸国^{ひたちのくに}（茨城県）の出身で下野国^{しもつけのくに}（栃木県）に進出してきたのではないとも言われています。

いずれにしても、平安時代に二荒山神社^{さいし}の祭祀と神領の支配権を手に入れた豪族^{ごうぞく}が宇都宮氏の祖であり、神社の南側に築いた館^{やかた}が宇都宮城の起こりとなったことは間違いありません。

戦勝祈願が、本当にそのきっかけになったかどうかははっきりしませんが、宇都宮氏の祖である豪族が、武士の棟梁^{とうりょう}に近づき、自分の領地の支配権を確立させることに努めたということは考えられます。（つづく）

「ぜんくねん えき前九年の役・ごさんねん えき後三年の役と宇都宮城」

源義家と清原氏・奥州藤原氏

前九年の役で滅んだあべ安倍氏の後に東北地方で勢力を伸ばしたのが、
きよはら清原氏です。この清原氏の内部抗争に、源氏の棟梁であるとうりょう源義家みなもとのよしいえが
介入したのが、後三年の役（1083～1087年）です。

義家は、かり雁の飛ぶ列の乱れを見て敵の存在を察知したり、逃げる敵と
和歌のやり取りをしたりと、文武を兼ね備えた理想的な武将として語り
伝えられています。

しかし、前九年の役がちやうてい朝廷からの正式な命令で出兵したのに対し、後
三年の役は、義家が関東の武士たちとの私的なつながりを利用して軍事
行動をおこしたといわれています。

後三年の役の結果、清原氏は事実上滅び、東北地方では、義家と協力
したふじわらのきよひら藤原清衡ひらいずみが平泉（岩手県平泉町）に本拠を置き、その後百年続く
奥州藤原氏繁栄の基礎を築きました。

一方で、源氏が関東の武士たちの長としてゆるぎない地位を得ること
になり、のちの鎌倉幕府の成立へとつながっていくのです。

そのような重要な出来事であった後三年の役の際に、宇都宮氏や宇都
宮城はどんな役割を担ったのでしょうか。（つづく）

「^{ぜんくねん えき}前九年の役・^{ごさんねん えき}後三年の役と宇都宮城」

後三年の役と宇都宮氏

後三年の役（1083～1087）は、その後の歴史の流れに大きな影響を与えた事件なのですが、その際の宇都宮氏の動きや宇都宮城のかかわりについては、よくわかりません。

後三年の役についての記録にも、宇都宮氏関係の記録や系図にも出てこないのです。

伝承によれば、宇都宮氏の祖である^{ふじわらのそうえん}藤原宗円は、^{てんえい}天永2（1111）年に没しているので、後三年の役当時は宗円が宇都宮城にいたことになりません。

東北地方への出兵に際しては、^{しもつけのくに}下野国（栃木県）は前線基地として、また兵士の供給地として重要な役割を果たしたと考えられますので、記録類に出てこないのは不思議です。

後三年の役に限らず、11世紀の後半から12世紀の中ごろまでは宇都宮氏に関する記録はほとんどなく、動静が不明です。このことが、藤原宗円が実在の人物かどうか疑われるもととなっています。

宇都宮氏がはっきりとすがたを現すのは、約百年後の^{うつのみやともつな}宇都宮朝綱の代になってからです。朝綱は、^{ごしらかわほうおう}後白河法皇を警護する名誉ある地位とされ

ていた「^{ほくめん}北面の^{ぶし}武士」を務めています。

この百年の間に宇都宮氏は、私たちにはうかがい知ることができない
歴史の水面下で、着々と力をつけていたのでしょう。(つづく)